令和８年５月　校長室だより　　発行責任者　大阪市立高倉小学校長　阪口　篤

たかしょう

キッズファミリー班の重要性

５月１日（金）、キッズファミリー班編成を行いました。高倉小学校では、毎年、１年生から６年生までが２～３人ずつ合計１５人くらいのキッズファミリー班を編成しています。このキッズファミリー班で、１年間を通して「スマイルキッズパーク」（文化祭のようなイベント）や「キッズファミリー遠足」（城北公園）などの楽しいイベントをしたり、毎週水曜日の児童集会でゲームをしたりしています。

日本の学校教育の単位は「学年」と「学級」です。ほとんどの学習を「同じ年齢の子」と一緒にしています。効率よく知識を伝達するにはもっとも優れた形です。基礎知識や語彙力が共通しているため、意見交換が容易になり、学びが深まります。

ではなぜ、わざわざ学校に「キッズファミリー班」という異学年集団をつくって活動するのか。

社会に出ると、職場などのあらゆる共同体はすべて「異年齢集団」で成り立っています。異年齢集団は社会の縮図です。異学年でのコニュニケーションというのは「低学年は歩くのが遅い」「言葉を選ばないと伝わらない」といった、自分とは異なる立場の人への想像力が身につきます。社会に出て必要なさまざまなコミュニケーションスキルは、同じ年齢の学級よりも「異学年集団」の中でより実践的に育まれていきます。また下級生にとっても、身近な上級生の振る舞いは、数年後の自分のロールモデルです。「あるべき姿」を間近で見ることで、学校生活の見通しや目標が持てるようになります。

「自分ができることを、できない子に差し出す」という行為は、見返りを求めない「親切」そのものです。６年生が１年生に教えるとき、そこには損得勘定抜きでの「ケア」が発生します。これこそが、「職場」「家族」「地域」などのあらゆる共同体を維持するための根幹です。強い者は弱い者を守り、さらに弱い者ができない仕事も担わなければ共同体は維持できません。ともすれば「自己責任」という昨今の風潮ですが、強い者もやがて老いて弱い者になっていくので、弱い者が「自己責任」で放置される世の中は誰にとっても住みにくい世の中です。

学校とは、自分と似た者同士、気の合う者どうしで固まって活動するばかりではなく、『考えが正反対』、『何を考えているのかよくわからない』というような異質な他者と出会い、それでもなんとか折り合いをつけて共生していくための『作法』を学ぶところでもあります。

高倉小学校では、同学年での『深まる学び』とキッズファミリー班活動での異学年交流を通して『いろんな人と共生・協働できるしなやかさ』を育んでいます。この両輪で教育活動を進めていくことで、子どもたちが「たくましく生きる力」を土台とした「確かな学力」を身につけた大人に成長していけると思っています。